

ICT活用授業研究会の振り返り

第1・2学年複式算数科

1学年：ものとの数 2学年：三角形と四角形

授業者：中西 大

学習支援サービス（ラインズeライブラリ）を活用することで、個別最適化された課題に取り組ませることができ、基礎基本を身につけることができるだろう。

1. 授業づくりの「しかけ」と子どもの自己調整

(1) 1学年

学習支援サービスにより、図に触れる問題を先に体験させ、後に自分で図を構成しながら取り組むことを体験させることで、わかりやすさを実感できるようにした。タブレット端末ならではの、容易に作図できるという長所を生かして効率化を図れるようにした。

(2) 2学年

教科書とノートでの学習、学習支援サービスでの学習を織り交ぜることで、繰り返し取り組みながら、知識と思考と技能をつなげられるようにした。テストを行ってさらに復習ドリルなどに取り組んだ後、課題に向かう。必要に応じてこれまでの学習や教科書・学習支援サービスで学んだことに戻れるような子どもたちの判断に期待した。

2. 授業の考察

(1) 1学年

授業の導入から学習支援サービスの問題に取り組んだ。ここでは、図を描くことなく問題を解くことになったため、先に課題を示しておいたり、後に図を描くという見通しをもたせておいたりすることが必要だったと考える。子どもたちの授業の流れに突然学習支援サービスの利用が入ったことで、子ども主体の動きを変えてしまったからである。

うめぼしでん車が9りようつなっています。
たまでん車はまえから5ばんめにつながれています。
たまでん車のうしろにはなんりようつなっていますか。



また、準備していた上図は、描くというより

並べ替えればできるもので、さらに必要以上の数の図を用意してあったため、子どもたちの問題の読み取りと図の作成に混乱をもたらしてしまったと考える。これまで、教科書や学習支援サービスでは、すでに必要な数だけ用意されていて数などを書き込むのみの学習活動が多かったからである。子どもたちの実態やこれまでの学習内容に応じた準備が必要だった。

あえて板書をしない授業を行ったが、1学年という実態から見ても、端末にある情報をモニタなどに映して発表し合うのは難しく、普段ホワイトボード上に示して活発に話し合うような姿が見られず、それぞれ独り言のように発言する授業になってしまっていた。指し示しにくいモニタの高さも問題かと考えた。

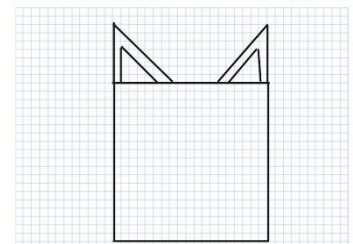


(2) 2学年

テストを行い、自分の理解度を確かめ、さらに不足を補うドリル問題に取り組む流れを考えていたが、やはり子どもたちの意識は、どんどん問題に取り組みたいというところにあり、成績を振り返って取り組むということには至らなかったと考える。

その反面、電車の正面や側面を学習した図形を使って描くという課題に対して試行錯誤しながら熱心に取り

正面（正方形） 耳（直角三角形）



組み合っていた。タブレットのロイロノートに用意した方眼に沿って直線を引き、直角を丁寧に作る姿が見られた。また、教科書で直角三角形の特徴や描いた図形が直角になっているかを確かめたりする活動では、子どもたちが互いに協力し合う様子が見られた。本実践で両学年の動きを見ていると、教科書や具体物は、タブレット端末より遥かに子どもたちを活発に動かすものになると感じた。